
第一章 創世期

ピッコロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一章 創世期

【Zマーク】

Z4641V

【作者名】

ペッコロ

【あらすじ】

これは、ある世界の神話時代にあたる物語です。物語は、日本の縄文時代と思われるところから始まります。

ほかに、のべふろ（<http://www.novelpro.jp>）にも投稿しました。

第一章 創世期

後の世に日本と呼ばれるこの国に、まだ文明が存在しなかつた頃のことである。一組の少年と少女が、見た目はかなり高齢と思われる女の話に聞き入っていた。三人の衣服はとくに、獣の皮を羽織つていいだけの簡単なものである。高齢の女は、カミラといい、この部族の呪い師をしている。

少年の名はヨルダ。母親は、彼を生むとすぐ亡くなってしまった。父親は、部族では優れた狩人として知られていた。その父親も、ヨルダが三歳のとき狩りに出たまま帰らぬ人となつた。孤児となつたヨルダを育てくれたのは、父の狩人仲間だった少女の両親である。少女の名は、アジという。

ヨルダとアジは、カミラが話す神々の話が大好きであつた。今日もその話を聞きに来たのだ。カミラの話によると、世界に何も無かつた頃、一人の女神がこの世に降り立つ。女神の名はメダリスといつた。メダリスは、アルという神様を生んだ。アルは、炎を司る神様であつた。そして、世界は炎に包まれてしまつた。次にメダリスは、トルという神様を生んだ。トルは土を司る神様で、炎に包まれた世界を土で覆つたのだ。時々地面が火を噴くのは、覆いきれなかつたアルの炎なのだそうだ。

次に、メダリスは、ウルという水の女神を生んだ。すると、世界は水で覆われてしまつた。トルが、怒り体をうねらせると水の中の土が盛り上がり大地ができた。

だが、まだ人が住める世界ではなかつた。そこでメダリスは、エルという女神を生んだ。すると世界に風が吹き始め、何とか生き物

の住める世界になつたのだ。

それでも、まだ完全な世界ではなかつた。次にメダリスは、シャルという女神とジオという神様を生んだ。シャルは月、ジオは太陽となり世界に夜と昼ができたのだ。そして、メダリスは、人を生み、それから草木や獣などありとあらゆる生き物を生んでいつた。最初生き物は、死ぬことが無かつた。やがて、世界は生き物で溢れかえり住む場所が無くなつてしまつた。そこで、メダリスは、死の神シンを生み、生き物に死が訪れるようにした。死んだものの魂は、すべてシンによつてメダリスの元へ還されるのだそうだ。

五年ほど時が流れ、ヨルダは十五歳、アジは十三歳になつていた。命の短いこの時代では、もう大人の仲間入りをしてよい年頃である。森へ木の実を探りに行くのが、彼らの日課となつていた。その日も、一人は連れだつて行き慣れた森へと入つていつた。しかし、いつもの日とは違い、木の実は少ししか集まらなかつた。そこで、二人は、少し森の奥まで行くことにした。すると、驚くほどたくさんの木の実がある場所があつた。一人は、夢中になつて木の実を集めめた。どれほど時間が過ぎたのだろうか、周りはもう薄暗くなろうとしている。だが、その辺りだけは、なぜかまだ明るかつた。そして、二人が気がついたときには、森はすっかり暗に包まれていた。周りを見渡すとなぜか仄かに明い方角がある。二人は、引き込まれるようにそちらの方へ歩いて行つた。

しばらく歩くと、岩が露出した崖の下へ着いた。崖には、洞窟があつた。明かりはその洞窟から漏れていたのだ。二人は安心した。ここにこんな洞窟が在るとは聞いていない。しかし、この辺りに彼らの部族以外、誰もいないとは聞いていた。きっと中には部族の誰かがいて、火を焚いているはずだ。そう思い、二人は中へ入つていった。驚いたことに誰もいない。その上、明かりの原因となるはずの焚火も、見当たらないではないか。洞窟の内部全体が、薄明るく

光っているのだ。洞窟は、まだ奥に続いていた。奥の方に人がいるのかもしないと思い、一人は、大きな声で呼びかけてみた。二人の呼び声は、しばらく洞窟に響いてから、虚しく消えていった。もう一度呼んでみたが、結果は同じだった。一人は、恐る恐ると奥へと進んでいった。やはり誰もいないし、洞窟が暗くなることもなかつた。五十歩ほど歩いてゆくと、そこは、行き止まりのやや広い空間になっていた。なぜか暖かく朝までいても凍えることは無いだろうと思えた。疲れ切った二人は、ここで一晩寝て、夜が明けてから帰ることにした。幸いなことに、採ってきた木の実はたくさんあつた。二人は、それを食べながら、この不思議な洞窟のことを話をしていたが、やがて体を寄せ合い寝つてしまつた。

彼女（或いは彼と呼ぶべきかもしない）は、多元宇宙の狭間を漂っていた。この宇宙の狭間を、亜空間と呼ぶことにしよう。最初彼女は、自我を持たなかつた。自我を持ち始めたのは、最近のことである。最近といつても、それは彼女固有の時間に於いてである。亜空間では、時間というものは意味を持たない。時間を持つということは、彼女自体が一つの小さな宇宙だと、いえるのかもしない。彼女が自我を持ったということは、幼年期が過ぎたということなのだろう。自我を持つ以前にも、接触した事があるのかもしれない。彼女の意思ではなく、亜空間を漂う中、自然に接触してきたのだ。ちょうど今、彼女は、別の宇宙の一部と接触していた。そして、初めて自分とは違う意思の存在に気がついた。驚いたことに、その二つの小さな意思是、彼女の体内へと入ってきた。彼女は、そつと二つの意識をさぐつてみた。充分に二つの意識を探つた後、彼女は、二つの意識と接触を持つことにしたのだった。

ヨルダは、長い夢をみた。創造神メダリスト話す夢であった。メダリストは、カミラが話したように銀色の髪と金色の翼を持つ女神

であった。それどころか、自分が思い描いていた姿と、寸部違わぬ姿をしていた。彼女の声は、覚えているはずのない彼の母親の声にも思えた。父のことや母のこと、アジの両親のこと、カミラの話にでてくる神々のことも話した。また、食べられる木の実や草、動物や魚の話もした。まだ他にもいろいろな話をした。彼の知っていることは、すべて話したと思われた後、突然夢は終わった。そして、彼は再び深い眠りへと入つていった。

彼女が、小さい意識たちと接触している間に、二つの宇宙は突然引き離された。引き離されたというより、自然に離れてしまったのだろう。一つの小さな意識は、もう元の世界に帰る事はできないだろ？と、彼女は思った。それから、この二つの意識を守つてやらねばならないとも思った。それは、彼女の本能であつたのかもしだい。

彼女は、急に忙しくなつた。まず、彼女は、彼女の体内に彼らが住めるだけの小さな空間を作つた。それから、彼らの話した神々を創ることにした。神話の通り、最初にアルを創つた。彼らの意識によるとアルは、一本の牙を持ち、全身真っ赤で長い髪の毛は炎でできていた。その通りに創り、命を吹き込んだ。

次は、トルだ。トルは、土色の肌をしていて、目は一つしか無く、禿頭には一本の角があつた。水の女神ウルは、青い髪に青い目をしていた。肌の色は水色で長い耳を持っていた。風の女神エルは、緑の髪に緑の目、透き通るような白い肌でやはり長い耳を持っていた。背中には、透き通つた四枚の羽があつた。ここまででは、順調にいつた。

しかし、太陽や月を創れるほどの空間は無い。仕方なく、彼女は神話を少し変えることにした。太陽や月は創れないが、一体の神と昼と夜を創ることはできる。昼の神ジオは、たくましい金色の体をしていた。夜の女神シャルは、日々長さの変わる黒い髪の毛と、月色の肌を持っていた。一番髪の毛が長い時は、髪の毛が全身を覆い

その姿を隠してしまった。短いときは、全身が現れる。その周期は三十日なのだ。月は作れなかつたが、夜の明るさは彼女の髪の長さによって変わるようになつた。ジオの力が強い間世界は昼で、シャルの力が強くなると世界は夜に変じてゆく。

彼女は六体の神々に命じて、小さな空間を小さな意識達が住めるようにした。それから彼女は、小さな意識から聞いた通りの世界を創つていつた。少しほは、違うところがあつたが、それはしかた無いであろう。ヨルダ達の持つ知識が完璧ではなかつたのだから。やつと、世界が完成した後、彼女は、眠つてゐる小さい意識の片方を起こした。

まず、アジが目をさました。洞窟は、やはり薄明るく暖かい。ヨルダは、ぴつたりと寄り添つて、まだ眠つてゐる。アジは、上半身を起こしてヨルダをに声をかけた。アジの声を聞いて、ヨルダも目を見ました。疲れは、すっかりとれてゐる。とても長い間寝ていたような気がした。きっと、タベの夢のせいなのだろう。夢にしては、とても生々しかつた。まだ、はつきりと覚えてゐる。ヨルダは、不思議に思いアジに夢の事を話した。驚いたことにアジもまた、ヨルダと同じような夢を見たという。少し怖くなつた二人は、すぐにもこの洞窟を出ることにした。ヨルダが、入り口があつた方を見るとそこは、光る壁でふさがれているではないか。慌てて周りを見回すと、反対の方に洞窟は続いている。きっと、自分の思い違ひだろうと思い、二人は、そちらの方へ歩いていつた。

洞窟の外は、やはり森であつた。もつすっかり明るくなつてゐた。ほつとして周りを見回す。ヨルダは、なぜか昨日の森とは違うように思えた。明るさが違うためだろう。そう決め込み、二人は、たぶんそちらが自分たちの家だろうと、思われる方角を目指した。思つたとおり、二人は、森を抜け出ることができた。しかし、そこにいつもの風景はなかつた。小川が流れているところに小川はなく、小

さな泉が湧いているだけであった。そのそばには、小さな堅穴式の家が、一軒だけあった。それは、一人が暮らしてきた家と全く同じであった。顔を見合せた後、一人は無言でその家に近づき、その中へ入つていった。家の中も、一人が暮らしてきた家と同じように思えた。だが、アジの両親の姿はどこにもなかつた。

心細くなつたアジが泣き出したとき、突然、二人は何者かに話しかけられた。話かけられたというより、直接意識に呼びかけられたようだ。

「何も心配することはありません。」

彼女は、まず、そう言つた。姿は見えなかつたが、二人は、それが女神メダリスの声であるとすぐに解つた。声には、神秘的な優しさがあり、二人の不安はすぐに消えていった。

「ここは、どこですか？」

ヨルダが、そう口に出すより先に女神は、答えた。

「ここは、私、そう私自身なのです。私がメダリスならばここは、メダリスでしょう。」女神の話は続いた。

「その家をでて、まつすぐ歩いてゆくと洞窟があります。その洞窟には私の子供たちがいます。困つた事があれば、彼らに相談するといいでしよう。彼らの名は、アル、トル、ウル、エル。それにシャルとジオ。もうあなた達は知つているはずですね。」

そう、彼らが当然知つてゐる神々の名前であった。

二人は、まだ、夢の中にいるような気分であつたが、とりあえず家を出てまつすぐ歩いてゆくことにした。すぐに洞窟は、見つかった。入り口は、四つ有つた。一人は、まず、一番右側の、入り口に入ることにした。そこには、アルがいた。

「熱いから、あまり近くには来ないよ。」

「彼は、まず、大きな声でそう言つた。

「はい。」ヨルダがそう答えると、アルは、大きな声で笑つてから

「う言った。

「火が必要なときには、私の名を呼ぶがいい。それだけで火を起すことが出来る。」

ヨルダがうなずくと、アルは再び大きな声で笑い、次の洞窟へ行くように言った。

隣の洞窟には、予想通りトルがいた。トルは熱くなく近づくことができた。

「私は、直接お前達には何もしてやれない。だが、土を肥やし木の実や食べられる草を育てることは出来るのだよ。土や大地のことでも私は相談したいことが有れば、ここに来なさい。」

トルは、低い優しい声でそう言った。

「はい。」

ヨルダがそう答えると、トルの一つしか無い目が優しく笑い、次の洞窟へ行くように言った。

水の女神ウルは、深い優しい声で言った。

「もし、怪我をしたり、病気になつた時は、私を呼びなさい。私が治してあげましょう。また、水のことで話があればここに来るといいでしょう。」

隣の洞窟へ行くとそこには、三体の神様がいた。風の女神エルを真ん中に、右には夜の神シャル、左には昼の神ジオがいた。まず、エルが爽やかな声でこう言った。

「私は、気まぐれで何も出来ませんが、あなた方が生きてゆくためにとても大事な物を作つてはいるのですよ。今は昼なので、シャルは眠っています。起こさないようにしなさい。」

ヨルダが、シャルの方を見ると確かに眠つてはいるようであった。ジルが、少し尊大な声で言った。

「私は昼の神、この世では太陽の代わりに、この世界を照らすのだ。我が眠つてはいる間は、シャルが世界を見守るであろう。」と。

四十回ほど夜の女神の周期が過ぎた。ヨルダは逞しく育つていた。

トルに相談して石の槍やナイフを作つてもらい、狩猟をするようになつっていた。その頃二人には、最初の男の子ができた。二人目と三人目は女の子であつた。二人は次々と子供を作り、三人の男の子と四人の女の子ができた。食べ物は十分にあり、飢えることは無かつた。その上、病氣や怪我をすると、水の女神ウルが治してくれた。ある日、アジは、最初の子供が伴侶を探すほど成長したことに気がついた。困つた事に、ここには兄弟姉妹しかいない。アジは、一人でウルの洞窟を訪れ、彼女に相談した。ウルは、

「それは私に助けられる事ではありません。母神様に相談しなさい。」

と言つた。

「でも、どうやつて。」

アジが言つ前に頭の中で声がした。あの懐かしいメダリストの声であった。

「私に相談があるときは、思うだけでいいのですよ。次にシャルの髪の毛が一番短くなる日の朝に、最初の子の伴侶が、あなたの家を訪ねるでしょう。それまでに、もう一軒家を建てておきなさい。」

その夜、アジは、そのことをヨルダに告げた。次の日から、家族の働けるものは総出で新しい家を作つた。メダリストが約束したその日、果たして若い女が一人、彼らの家を訪ねてきた。彼らの子供達も、孫たちもそうやつて伴侶を得ることができた。一人の孫の子供達が連れ合いを探す頃には、メダリストに頼まなくても、連れ合いが見つかるようになつっていた。

二人は、長く生きすぎていることに気がついた。そして、メダリストに最後の願いをすることにしたのだった。世界に死の神シンが必要な時が来たのだ。そして、二人は長い生涯を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4641v/>

第一章 創世期

2011年10月9日13時28分発行